巻頭言

「攻める」

企画管理部長　塩谷　繁

平成26年を振り返り、日本のスポーツファンが興奮した話題の一つに、テニスの錦織圭の活躍が挙げられるでしょう。４大大会のＵＳオープンで準優勝のほか、ツアーで４勝を挙げ、年末のツアーファイナルズではベスト４に入り、世界ランクを５位にまで押し上げました。彼は、インタビューの中で強くなった要因について尋ねられ、マイケル･チャンコーチの指導により、攻めのパターンが増えたと語っています。特に、リスクを背負いながら前に出る攻めを覚えたことが大きいとしています。優れた素質に加え、実力を引き出してくれる有能なコーチとの出会いが彼を強くし、新たな攻めの姿勢を確立できたといえます。

農業の分野でも、国際化に対応した「攻めの農林水産業」が示され、「生産現場の強化」、「バリューチェーンの構築」、「需要拡大」を柱とした様々な施策が実施されています。試験研究では、「攻めの農林水産業推進本部」で示された「新品種・新技術の開発・保護・普及の方針」において、「強みのある農畜産物」、「強みのある産地」の実現を目指した研究開発方向が求められています。こうした状況の中で、平成25年度補正事業として「攻めの農林水産業の実現に向けた革新的技術緊急展開事業」がスタートしました。九州沖縄農業研究センターでは、「北部九州における稲麦大豆多収品種と省力栽培技術を基軸とする大規模水田高度輪作体系の実証」、「暖地における原料用かんしょと加工用露地野菜の大規模機械化生産体系の確立」、「サトウキビの安定・多収栽培技術の実証と高バイオマス量サトウキビの生産性評価」および「九州における飼料生産組織、ＴＭＲセンター、子牛育成センターが連携する地域分業化大規模肉用牛繁殖経営の実証」の４課題に中核機関として、九州沖縄地域の公立研究機関、普及組織、生産者、民間企業などと連携して取り組んでいます。この事業では、これまでの研究成果である先進的要素技術をパッケージにして、生産現場に対し今後の担い手に向けた新たなビジネスモデルを提示し、実証することを目指しています。当然ながら、農家は新たな技術導入というリスクを背負いますが、次世代のために攻めの農業に挑んでいる訳です。

さて、平成27年の干支は羊です。おとなしいイメージのある羊ですが、群れから外れて１頭になると、追い詰められて相手に突撃したり、蹄を踏み鳴らして威嚇するといったことがあります。羊は群れを作る性質が強く、群れから外れることで強いストレスを受け、窮鼠猫を噛む状態になる訳です。このような「攻撃」の姿勢は、牧柵の外の外界に出ようという戦略的なものではなく、単に恐怖心からの無駄な行動といえます。有能な牧夫に誘導されれば、群れから外れることもなく、無駄なエネルギーも使わずに、群れと一緒に目的地に行くことができます。

農業の「攻め」にも、有能な指導者が不可欠です。強い競争力で有名なオランダでは、EER（Education、Extension、Research）と呼ばれる農業の教育・普及・研究システムが大きな役割を果たしてきたといわれています。日本におけるこれまでの指導体制は、農家に提供するノウハウについて対価を求めない反面、指導者側にとっても失敗による損失を実感できないものでした。今回の補正事業では、農家は大きなリスクを背負って参加してくれています。しかし、リスクが大きいほど攻めの効果は高いといえます。幸いにも、日本には、地域性豊かな多種多様な農畜産物があります。また、技術力のある民間企業があります。直売やインターネットなどを活用した販売戦略があります。私たちは、これまでのように技術の開発者としてだけでなく、指導者として、生産者、民間企業、普及機関などと連携した技術支援が必要です。リスクをバネにして大きな成果を得ること、これこそ「攻める」の基本であり、醍醐味だと思います。皆さんがこれらの課題に果敢に挑戦できるよう、研究態勢を整えて行きたいと思います。